
少し違わない？

四月朔日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少し違わない？

【Nコード】

N0122V

【作者名】

四月朔日

【あらすじ】

目が覚めたら豪華な部屋。

そして頬に傷のあるオッサン。

私の人生終わった。

目が覚めるとそこは豪華な部屋だった。

そう、豪華な。

自分の部屋ではない。

絶対に。

なぜって田舎の3K、家賃4万円のぼろアパートの部屋とは比べるまでもないキラキラな部屋。

いや、部屋と呼んでいいのか？

これはもうホールではないか。

キラキラピカピカまぶしい。

…なんか、自分の語彙力のなさにため息が出る。

とにかく、この部屋を豪華と呼ばなければ、なにを呼べばいいかわからないため、豪華とする、私の、中で。

絶賛混乱中なわけだけど、ここはどこだ？

そうだ、ここは豪華な部屋だ。

いや、違う。

そういう答えを望んでるわけじゃない。

じゃあなんだ。

ここは豪華な部屋だ。

そうだけど、そうもつと詳しく！

例えば、どこどこの豪華な部屋、みたいな。

さらに言つたら何県何市、なんという建物の豪華な部屋、みたいな。

…うん、結論。

わかんない。

目が覚めて見覚えがないところをわかってほぅが無理だ。

どうするか。

部屋を出て誰か探るのが一番だけど、ぶっちゃけ怖い。

もし、拉致監禁とかヤバい感じだったらって悪い方に意識が傾くのをどうにか堪えてるわけだし。

頬に傷があったり、凶器持ってるような人に出会ったらじ・えんど。

私の人生は終わる。

間違いなく。

だけど、いつまでも私がグダグダ言っても面白くないし、出よう。
豪華な部屋を。

ガチャ…パタン

終わった。

私の人生じ・えんど。

扉を開けた先にいたのは頬に傷のある、腰に剣ぶら下げたオッサン
だった。

私の人生終わった。

ガチャ

「おい、いきなり閉めることはないだろう」

「あ、すみません」

ペこり

悲しきかな日本人。

犯罪者にまで頭を下げてしまうとは。

これで確実に向こうの優位は決まった。

「まったく、先が思いやられるな」

「はあ、すみません」

「君はわかっていて謝っているのか？」

「いえ、まったく」

「はあ……」

「…すみません」

「…」

そのままお互い無言で見つめ合ってしまった。
よく見ればなかなかいい男だった。

発された声は低く響くバリトンボイス。
凜々しい目元。

優しさを表すような緑の瞳。
薄い唇。

スツと通った鼻筋。

精悍さを感じる輪郭。

髪はダークブロンド。

身長は180cmはあるだろう。

逞しい胸板。

足も長い。

なんかいい匂いもする。

オーラもハンパない。

オッサンだけど。

うん、だんだんと様になる言葉が出てこなくなる。
しょうがない。

しかも最後あんま良くない。

向こうもこっちを観察してるっぽいけど、なんなんだ。

いろいろ聞きたいけど、怖い。

だってさつきからスルーしてるけど、なんか服装おかしくね？

それ言えば、まず豪華な部屋もおかしい。

なんかベルばらみたいなの。

嫌な予感。

「……」

無言が痛い。

何か言わなければ。

「あー、申し訳ありません。少しお尋ねしたいんですが、よろしいですか？」

私は接客業で身に付けた作り笑顔を張り付けて声をかけた。だってそうしなければ進まない。進んでも悪い方向じゃないかというのはスルーで。

「なんだ？」

うむ、いい声だ。

「私ちょっと意識をなくしていたみたいで、ここがどこかわからないのですが、どこなんでしょう」

「ここはフォウレンティータ帝国の首都マーブルにある王城の一室だ」

「はあ、マーブル、フォウ…？」

「フォウレンティータ帝国」

「フォウレン、ティータ、帝国。マーブル？」

「そうだ」

「えーっと、じゃあ、なぜ、私はその、とても外国っぽいところにいるんですか」

「それはあなたを喚んだからだ」

「よんだ…私よばれた記憶ありませんけど」

「多分あなたが眠っている最中だったんだろう。喚んだときあなたは眠っていた。だからそのまま寝かせていた」

「はあ…」

よばれたって言うても記憶まったくないんだけど。
寝ている最中って夢遊病？
わけわからん。

「もう少し詳しくお話を聞きたいんですけど」

「ああ、そうだな。多少混乱もしているだろう。座って話そう」

「はあ…」

「こちらだ」

案内されたのは先ほど開けたドアの向こうに広がるこれまた豪華な部屋だった。

ヤバイ。マジでベルばら。

なんだこの部屋。

内心アホかなんて思っけていても顔に出さない。

接客の基本だ、うむ。

そのまま部屋の中央にあるソファに座り様子を見ようとすると、どこから現れたのかきれいな女の人がお茶をだしてくれた。

お茶と言っても煎茶とか玉露とか烏龍茶とかせんぶり茶とかでは決してない。

なんかいい匂いのするお紅茶みたいな。

お茶請けもなんかきれいなやつ。

一通り出揃うと女の人は消えて、オッサンが話だした。

「いきなりのことで驚いているだろうと思う。これから話すことはさらにあなたを混乱させるだろうがどうか、冷静に受け止めて欲しい」

「はあ」

「まずは自己紹介させて頂いても？」

「ああ、はい」

「私はフォウレンティータ帝国の皇帝、バステイアン・ユステイナス・ジール・フォウレンティータと言う。バステイアンと呼んでくれ」

「はあ、私は深谷豊です。こちら風に言うならユタカ・ミタニです」

「ユタカ、良い名前だ」

いや、ちよ、誰が名前呼びオーケーしたよ。

まあ言わないけどね。

つかこのオツサン、皇帝とか言わなかった？

地球に帝国とかまだあるわけ？

まじここどこだ！

何を言う気だこのオッサン。

いや、皇帝相手にオッサンはまずいか？
でも直接言わなきゃ平気か。

「ユタカ。君は君が生まれ育った場所とは違う地にいる」

「それはわかります。日本にこんな場所ありませんから」

「そうじゃないんだ。ここは世界が違う」

「世界？」

「そう君が住んでいた世界ではない。君の住んでいた世界をなんと呼ぶかはわからないが、この君が今いる世界の名は、スーラ」

「スーラ…、じゃあここは地球じゃないって言うんですか」

「そういうことだ」

「…わかりました。とりあえず否定しては話は進みませんから、あなたの頭がおかしいことは置いておいて、なぜそんなところに私が？」

「今サラッと辛辣な言葉が…」

「なにか？」

話が進まない。

いい年したオッサンが異世界とかまじヤバい。

でもこういうのって頭から否定するのはよくないって言うしね。少しぐらいその戯言に付き合ってやろう。

「君がなぜここにいるかだが、うむ、君は私の妃として喚ばれたのだ」

「は？…オッサンの妃？」

「そうだ。私の妃として。ところで先ほどから頭おかしいとかオッサンとか傷つくのだが」

「あー、すみません」

「…」

「なぜ私なんですか？一応仮にも皇帝ならよりどりみどり、いい女もいい男もいくらでも手に入りそうなもんですが。はっ、もしかこんなオッサンにもなるのに結婚できないなんてなにかとんでもない悪癖が！？飲む打つ買うどれ？いや全部！？朝から寝るまで飲んで賭けて自分の気に入った人全てをお手つきにして後宮を魑魅魍魎の跋扈する場所にして帝国の国庫を空にして、あまつさえ自分にきれない姫を差し出さない国に戦争を仕掛けて蹂躪して隷属させる最低最悪の皇帝だから、誰もお嫁に来てくれないんですか？」

「…君は、…本当に私がそんな皇帝だったらもう君は生きていないと思うが」

「まあ今のは冗談ですが。何か問題があるんですよね、あなたに」

疑問系ですらない決めつけた言葉にオッサンは言葉をなくしている。

「まあ、私に問題があるのは確かだが、そういったことではない」

「なら、マザコン。お母さん以外の人に愛を感じないとか…これ自分で言っというてなんだけどキモイな」

「そうではない。私の努力次第でどうにかなる問題ではないのだ」

「ああ、生まれもった性癖が男しか愛せないとか」

「決して違う。私は女好きだ」

「やっぱり女癖の悪さか」

「…違う」

「もつどついうことですか」

大して面白くもない話に付き合わされてつまらん。
ダルい。

なんかもつ面倒な予感しかしない。
早く終われ。

「私の生まれた日が悪いのだ」

「はあ…」

「もともとこの国では皇帝の妃は代々他の世界から喚んでいたのだ。その喚ぶ条件が日と月の周期なのだが、皇帝の生まれた日ともろもろの条件が重なった日にしか妃を喚ぶことはできない。ここまではいいか？」

「こくん」

「なぜ擬音を声に出す」

「なんとなくです」

「…。日と月さえ合えば喚べる。だが私の生まれた日が悪かった。私が生まれた日は約80年に一度しかない日なのだ。そうすると条件はかなり厳しくなる。歴代の皇帝ではいなかった」

「それは大変ですね」

「そう大変なのだ。星見によると私が生まれてから47年後の7月の3日、この日以外はないということがわかった」

「それは随分先ですね」

「そうだな。だがこれは決まりなのだ。他の世界の娘を妃にするの

は。そして、その娘以外を私の傍に侍らすことは許されない」

「それは面倒ですね」

「だが私は皇帝だ。私の血を絶やすこともできない。」

「それは凄いですね」

「ああ、それで君が喚ばれた」

「ちよつと唐突じゃないですか？なぜ私なんですか」

「それはわからない」

「わからない！？何かしら理由とかなないと納得できません。帰りたいって言っても帰れませんよね？頭おかしいオッサン」

「私は君の人となりかわからないよ」

「そんな話してません。理由は？」

「では君が私の好みということはどうだ？」

「いやそれ思いつきり思いつきですよ？私こそオッサンがわからないです」

「そのオッサン呼びは定着したのか」

「それよりオッサン。じゃあ私は妃にならないとどうなるんですか？」

「なるしか道はない。ならなければ君は存在意義を失い魂だけの存在になり、永遠にこの地を彷徨うことになる」

「うわっ、凄い嫌だ」

なんかどうにかならんかな。

やっぱり嫌な予感は的中だよ。

普段はまったく当たらないのに。

早く終われと思ったけど私の人生終わるな。

なんかさつきからオッサンて言いまくってるけど大丈夫かな。大丈夫だよな。

だって頬に傷あるけど、眉間に皺よってるけど、言葉遣いとか穏やかだし。

いい年したオッサンなわけだし、いちいち若い女の暴言に怒ってたらしようがないし。

それに自分をありのまま受け入れることも大切だよな。

しかしこのオッサンさつき47年後って…

「あのつかぬことをお伺いしますが、オッサンお年はおいくつに…」

「47だ」

「そうですか。そうなんですか」

「ユタカ、君は？」

「私は永遠の17才です」

「そんな風に睨みつけられると嘘とわかっていても聞き直しづらいのだが」

「突っ込んで下さい。23です。まだまだ若々しい乙女です！嘘です。乙女じゃありません」

「ああ、気にすることではない。身をもってさえいなければ問題な

い

「そうですか」

予想以上に年上のオッサンにビビる。

だって顔は怖いけど、まさかあと3年で50には見えない。

まじでこのオッサンと結婚すんのか。

まじで？

なんかさつき引かなかったことが…あつ、あれだ。

「もうぶっちゃけ聞きます。オッサン未経験？」

「…なぜ？」

「だってさつき女の子侍らすこともできないって言ってたから。その強面でチェリーなのかと」

「はあ…、もちろん経験はある。側室に迎えたり子を産んでもらうことはできないが」

「はあはあ！良かったです！さすがに初夜で実は…とか言われたらまじ終わりですからね」

「人並みだ」

「それは何よりです」

「ところで先ほどから君は私の妃になることをそこまで嫌がっているように見えないが、いいのか？」

「はあ、なんかいろいろ考えるの面倒なんでいいかなーと。なんか問題ができればその都度考えればいいかな、と思ひまして」

これはまじです。

だってさつきからいくら美味しいお紅茶飲んでも減らないし、温くならないし、お茶請けはいくら食べても減らないし。

とりあえずこのオッサンの子供産めば私の人生保証されたようなもんでしょ。

大いなる打算を含んでおります。

だってよくわかんないけど結婚するには最高じゃないか。

ちよつと恐いけど顔よし。

身長も高い。

皇帝だつたらお給料もいいだろうし。

頭おかしいけど馬鹿じゃなさそうだし。

それに側室も持てないし私以外に子供産んでもらうのもダメってことはドロドロの後継者争いなんてのもないだろうし。

うん、中小企業のそこそこの男と結婚するよりは断然いい！

メイドさんとかいんのかな。

お帰りなさいませ、ご主人様つて一度は言われたい台詞だからな。

「はい。そのお話お受けします！」

「そうか！ありがとうございます！」

まあ、普通こういうときって若いかつこい王子様がお相手なんだろうけど、この際だから細かいことは置いとこう！

まだまだ私の人生終わってないぜ！

オッサンはまだ執務が残っているからと部屋から出て行った。

入れ代わるようにさっきお紅茶いれてくれた人が入ってきてあれやこれやと気を使ってくれた。

でも特にいらない。

だってめっちゃ庶民なんで自分のことぐらい自分でできる。

お紅茶も減らないし。

彼女には少し出て行ってもらい、シンキングタイムです。

帝国 大きい 皇帝 凄い お金持ち？ 遊んで暮らせる

単純な思考回路の持ち主でございます。

でも金持ちって意外とケチって聞くからなく。

こうなれば婚前契約だな！

でもまじであの人は私でいいと思ったのか？

わざとオッサンとか言ってみただけど、完璧妃とかには向かねーって思うだろ。

私の妃のイメージはバルコニーから手を振る。バルコニーから手を振る。バルコニーから手を振る。車内から手を振る。

このぐらいしかない。

もっと大変なのかな。

とにかく子供産めばいいんだろうし。

細かいことは起きてから。

とりあえず自己紹介しておこう。

話が進んでもあまり私の話題になることはない気がするし。

深谷豊、23才、専門学校卒業後はパートとして菓子屋勤務、彼氏なし、否乙女、身長164cm、体重54kg、あとはー、趣味は特になし、男のタイプは経済力がある、次男、結婚後に姑と同居しない、あつこれは結婚相手への希望だった、それからー、けっこうないもんだな、言うこと。
性格は適当。

面倒なことは嫌い、今考えるより明日考えればいいじゃん。

口癖は、なんとかなるさ。

あまり難しいことは考えずに生きてきました。

唯一の特技はナンプレ。まったく使えない。

こんなんで生きていけるのかね。

不安だ。

けどまあいきなり現れた異世界の女とか、みんないいのか。
私だったら怪しすぎて近づきもしないわ。

あっ、なんかもう夕飯の時間みたい。

お紅茶の人が言うにはまだマナーとかなにも知らない私は部屋で食事してくださいということらしい。

それからお忙しい皇帝陛下も私のためにわざわざ来てくれるんだから失礼のないようにだつて。

頼んでねーよ！って感じた。その皇帝陛下が来る直前にひつろいテーブルにたくさん料理が並ぶ。

並べば皇帝陛下もといオツサンが入ってきて不便はないかとか偉そうに聞いてきた。

適当に答えて、このオツサンは偉いオツサンだったと改める。

お紅茶の人がオツサンが入ってきてても立たない私を睨みつけている。まじ恐い。

「いろいろと用意させてみたが口に合うか？」

「はあ、大丈夫です」

「それは良かった」

はあなんて気の抜けた返事したけど、この料理まじうまい！

うまいもん鱈腹食ってやると気合いを入れて食べ始めたけど、全部うまい。

いつもなら、ゆっくり食べながらテレビ見たり携帯チェックしたりするけどそれもできないし。

ただ食べることに専念。
絶対に食べきれないから、一つの器にまとめとめて後からちましま
食べたい。
貧乏性故だ。

「そのように美味しそうに食べてくれると私も一緒に食べていて気
持ちがいいな」

「はあ、そうですね」

「マナーなどは気にするな」

「言うの遅いです。もう散々肉にかぶりついてます」

「はは、そうですね」

「こんなの毎日食べてるんですか？」

「そうだな。私はこんなにいらなと思っていますが決まりらしい」

「羨ましい」

「ユタカもこれからこの食事だぞ」

「そーですねー」

天国。

最近は食費節約のためにそうめん、ひやむぎ、そば、そうめん、そ
うめん、みたいな生活だったから肉とかみなぎる！

「ユタカは、普段こういう食事はしないのか？」

「普段はもっと質素儉約なご飯です。特別貧乏だったわけじゃないですけど、女の子というのはいろいろと金のかかる生き物なんです」

「そうなのか」

このオッサンよくわからん。

「ユタカ、食事の後は今後について私の側近も含めて話合いたいのだがいいか」

「ああ、そうですね。早いうちに決めた方が後々楽ですもんね」

「そうだな」

「ところで、残ったやつはまとめて後で食べてもいいですか」

「…ああ、構わない」

私の断定文を感じ取ってうなずいてくれた。

妻のわがままを聞く良き夫。

うん、素晴らしい第一歩だな。

まだ夫婦じゃないだろうという疑問はあえてもたないように！

オッサンと一緒に入って来たのは3人のナイスミドル。
みんなオッサンだけど男の色気ムンムンだよ。

「ユタカ、これらが私の信の置ける側近たちだ。何かあればこれらに声をかけるのが一番だ」

「はあ、」

「まず宰相のウランバルト・ユシフィル・ゼダロ」

「よろしくお願い致します。ユタカ様」

「はあ」

名前長っ

百戦錬磨って感じ。

あ、決して恋愛方面でなく、政治の世界で。

「軍部最高指令長官のグリジラ Gum・アセンデ・ジグリ」

「以後お見知りおき下さい」

「はあ」

名前長っ

強そっ。

その場にいるだけで逃げ出したくなるわ。

「私の側近で雑務もろもろをこなすエドリツヒ・シーデンハイナ・ダゾル」

「よろしくお願いします」

「はあ」

名前長っ

軽そう。

見た目が、私でも持ち上げられそうに細い。

「最後に執事のダグラナリア・タジナハヤ・アーマ」

「お願い致します。ユタカ様」

「はあ」

名前長っ

セバスチャンだ。

執事といえばこの人みたいな。

私も挨拶すべきか？

「はじめまして。よろしくお願いします。ここじゃないところから来ましたユタカ・ミタニ、女です」

「女ですって、見ればわかるだろう」

「オッサン、わかってないな。今のはボケ。誰かがなんでねんって突っ込むの。私の世界の常識だよ（芸人の）」

「そ、そうなのか。すまなかった」

「いいよいいよー」

私とオッサンの会話に他のオッサンはしばしばう然。

まあ、わからなくはない。

国のトップにタメ語。

でもまあみんな長つたらしい名前で覚えられないこと确实！
役職名でいつか。

「挨拶も済ませたことだ、今後の話としよう」

「はあ」

みんな椅子に座って、すぐにお紅茶が執事によって出された。

私の運命やいかに！

続きはwebへ！

古いつて誰か突っ込んでくれたかな。

「それでは、話合いを始めますがよろしくですか？」

「うい」

みんな頷くだけだよ。
なんか偉そうだ。

「まずユタカ様は陛下との御婚姻を了承して頂けますか？」

「うい、バクバク」

「それは諾ということでは…？」

「はい、モグモグ」

「本当によろしいのですね？」

「いいて言ってるじゃないですか。なんか文句でもありません？ハグハグ」

「いえ、決してそういうわけでは。ただ歴代の妃を喚んだ際は、少々骨を折ったと様々な文献に記されているもので」

「ああ、帰りたいて泣きわめいたりしないから、ですか。ゴクゴク」

「まあ、言ってしまうば」

「そんなことしても疲れるだけだし、面倒だし、柳のように流されて生きていくのが一番ですよ、宰相さん。ゴキユゴキユ」

「ユタカ様は物分かりがよくて助かるな。はっはっは」

「いやいや、そんなわけでは。長官さん。ガツガツ」

「そんな謙遜なさらないで下さい。ユタカ様」

「謙遜は日本人の美德ですよ。側近さん。モゴモゴ」

みんなで私を誉めてる向こうで一人執事さんがニコニコしてる。ちよ、不気味ですって！

「…」

みんなでそんなに見つめられたら食べにくいわ！私先ほどから夕飯の残り物を一人で食べてます。冷めても美味しいです。

美味でございますー！

だからそんな冷めた目で見んな！ジジイ共！

「ユタカ様、美味しゅうございますか？」

「はあ、美味しいです」

「それはようございました」

なんか動物見るような目は止めてくれ、切実に。

「おほん、話を戻しましょう。陛下とユタカ様のご了承を得ること叶いましたので、話を詰めてまいりますよ」

「式は8月の10日がよろしいそうです。ひと月ごいますから、近隣諸国への案内も十分でございます。いかがですか、陛下、ユタカ様」

「私は構わん。ユタカはよいか？」

「私もいいですよ」

「では8月の10日に。それまで忙しくなりますね。あとは、ユタカ様の身の回りを整えねばなりませんね」

「あつ、そうだ、オッサン。私からもお願いがあります」

そう言った途端、オッサンたち全員がヤバいって顔してこっち見た。私なにもしてないよー。

そんな顔してもオッサンたち気持ち悪いだけだ…。

「そんな見つめられたら食べにくいわ」

あれ、さっきも同じこと言ったかも。

すぐに復活したのはオッサン皇帝。

「すまん。それで願いとはなんだ。私の妃になるのだ。遠慮はいらん」

「じゃあ遠慮なく……」

ごくり

みんな喉鳴らして血走った目で見んじゃねえ。

「まず、一人部屋がよくて、ご飯はたくさん食べたくて、あんまり面倒なことには巻き込まれたくないです。あと皇帝死んでも養ってね」

「おい、あまり人前で私が死ぬなど口にするな。不敬だと罰せられるぞ」

「すみませーん。でも私雨風しのげて、ご飯が三食出れば何も文句はありません！」

「…本当にそれでよろしいのですか？」

「はあ、はい。これ以上に何を望めばいいんですか」

「例えば金銀財宝が欲しいとか、見目麗しい者を召し上げよとか、珍味を取り寄せるとか、屋敷を建てて欲しいとか、いろいろあるでしょう」

「えー、それってお腹膨れない！お金はあるにこしたことはないけど、妃つてやたらお城からでれないんでしょ？だったら買い食いもできないし。色んな男手玉にとるほど経験豊富でもないし。珍味ってお腹にたまないよ絶対。屋敷はいらん。掃除とか大変だし」

「それなら構いませんが…」

「なにさ、私の食い意地の張り方みつともないとか思ってるな。いいんだよ！作者だつて最初はこんな食い意地の張った主人公にするつもりじゃなかったわ」

「…そうではない、ユタカ。これらはユタカがもつと無理難題ふっかけてくると思つたから身構えただけなのだ」

無理難題つて私はそんな悪女に見えるか？

こんなにも愛らしい私をつかまえて、…嘘です。愛らしいとか大嘘です。

「ユタカ、お前がそれで良いならいいが、ほかに望みはないのか」

「ほかあ？…特にな、くない。怖い人は嫌です」

「どついうことだ？」

「お紅茶入れてくれた美人な人、あの人私睨んでたよ。睨むのよくない。そばにいるなら可愛くて優しい人がいい、うん！」

「そうか、わかった。そう取り計らおう。頼んだぞ」

「はい、かしこまりました。ごぞいます」

うおーセバスチャンまじすげえ！

本物だよ！

なんか私の要求はあっさり通ったらしい。

だが、気を緩めればそこから家庭崩壊の危機だからな！

幸せな家庭を築こうじゃないか！

私のお願いも通ったことだし、あとは、よくわからんね。
何をすればいいんだ？

「ユタカ様、それでは明後日から礼儀作法や国の歴史など妃として身に付けておかねばならぬことを、学んで頂きたいのですがよろしいですか？」

「げっ！勉強しなきゃいけないの？どのくらい？たくさん？この国の歴史つて、建国からどのくらい？」

「我が帝国は天地創世の折よりあつたとされている。万年の時を刻んでおりますからな、なに、ほんのさわりを学ぶ程度ですよ、ユタカ様」

「あなたが学ぶわけじゃないでしょ、長官……」

「まあまあ、可愛くて優しい家庭教師と美味しい菓子を用意させますから。どうかここはひとつ……」

「ひっひっひっひ、お主も悪よのお……ってなにやらすねん！」

「おお！なんとっ！」

「ユタカ様は大層愉快な方でございますな！」

「ユタカ……」

「…」

なに一人つつこみさせてんのさ。
やめてくれ。

こつちに来てからだんだんとお笑い要員になってる。
なんかオッサンたちは凄く楽しそう。
なにがツボったわけ？

「ユタカ…今は、なんなのさ？」

真面目な顔しても傷のある頬がひきつってますよ。
ほかのオッサンたちも笑います。

「今の凄い古臭いボケだったのに、なにがおもしろいわけ？ただの
時代劇の悪役のセリフじゃん」

「そうか、悪役のセリフか、くっく」

「早く説明しろ、オッサン」

「この前捕まえた貴族に罠を仕掛けたときに、まったく同じ言葉を
言ったのだ、くっく」

「え、っ！そんなやつ今時いるわけ？古くさっ！」

うっわー、結婚早まりすぎた？

「ユタカ様はとても愉快な方でございますね」

「ほめ言葉じゃねーから、それ。側近さんよ」

「申し訳ございません」

満面の笑顔で謝られてもしょうがないわ。
まじで早まりすぎた。

こんなのが国のトップって先が思いやられる。
あ、でもみんなオッサンだからすぐ死ぬか？
ここは前向きにいろいろ前向きに！

「で、勉強のほかにやることあんの？」

「あと召し物の採寸ですか、式の進行の確認などでございます」
「たくさんやることあるな。面倒臭い」

「ユタカ様のやる気次第ですぐに済むものもございますから」

「へーい」

オッサンが空気。

笑顔で私と宰相のやりとり見てるけど、あんたが私と結婚すんだろ
うが！

いや、でもこれは尻にしくチャンスか？
でも少しぐらいなんか喋れよ。

12 (後書き)

読んで下さる方、評価して下さいの方、ありがとうございます。

まさかランキング上位に入ることができるとは…嬉しい限りでございます。

ただ書き殴っているような文しか書けません、これからもよろしく願います。

あの後オッサン3人は帰っていった。

今にもあとはお若いお二人でとか言いそうだった。

まじありえない。

私は若いけどもうひとりはおオッサンだから。

私がこのオッサンと同年代に見えるのか。

そしてそれを意識して微妙にもじもじしてるオッサンまじキモい。

いい年してなんなんだ。

頭沸いてんじゃねーの。

「ユタカ…」

うわっ、なんか甘い空気出してきた！

ちよっと鳥肌がっ！

「ユタカ…喚ばれてきてくれたのがユタカで良かった」

ちよっとちよっと！

なにさらっと横座ってんのさ。

「私は幸せ者だ。ユタカとこれからの人生を築いていきたい」

腰に手を回すな！

耳に息をかけるなっ！

加齢臭じゃなくていい匂いするのがむかつくわ。

「改めて申し込みたい。ユタカ、私と結婚して欲しい」

「…」

「ユタカ、返事をして欲しい」

「結婚してやるよ。そのかわりしっかり稼いでこいよ！」

「ユタカ！ありがとう！絶対君を幸せにする」

「お願いしまーす」

ヤバイ。

ちよっとキユンとした。

結婚とか意識してなかったけど、正面きって言われると恥ずかしいな。

「ユタカ、ありがとう」

うわっ、手にキスとか真顔でよくできるな。

手汗ハンパない。

今きつと顔真っ赤だわ。

恥ずかしいっす。

「ユタカ、君は可愛いね。真っ赤になってる」

「うっさい」

「すまない。君の反応があまりに可愛いらしかったものだから」

「はいはい、わかりました。その手はどけて、こつこつこつとは式を挙げてからです」

「これは手厳しいな」

「厳しくないっ」

恥ずかしい。

でもこれ以上真っ赤なの見られるのもいや。

冷静にクールダウン、クールダウン。

うん、おっけい！

「それでは私はそろそろ退散するでしょう」

「ああ、お休みなさい」

「ユタカ、良い夢を…チユツ」

「うおっ！」

「お休み」

おのれえっ、最後の最後に爆弾落としてったな！
リップ音付きでこちゅーとかまじ鳥肌もんだ！

でもまあ悪い気はしないけど。

あれー？

話が大分進んでいるよ。

赤ちゃん産まれちゃった！テヘッ

嘘です！

今のは赤ちゃん産まれた時の予行演習で、まだ産まれてませーん。
てかまだ妊娠もしてませーん！

私たち清い関係です！

でも、とうとう今夜、一線を、踏みにじってやりますよ。

なんだかんだといろいろあつて今日、式を挙げました。

どこから来たともわからない女を国民の皆様方は暖かく迎えて下さいました。

貴族はちよつと違うけど。

そう、本当になんか違う。

私絶対に靴に画鋲入れられたり、服が泥だらけになったり、階段突き落とされたりするのかと思っていました。

違いました。

貴族まじ凄い。

熱狂的。

この一言に尽きる。

城の中ですれ違う人みんなに握手とかサイン求められる。

芸能人じゃないですって言ったけど無視された…。

ちよつとへこんだ。

プレゼントは全部滋養強壮、精力アップ！子宝祈願、安産祈願とかそつち方面。

あとは気が早いのかベビー服。もはやベビー服と言えない子供服。
女が男、どっちが産まれるかもわからんのに。
よくやるよ。

今日なんかみんな初夜ってわかってるから、廊下に貴族スラックと並
んで拝みまくってた。
まじおかしい。

さてそろそろダーリンが来る頃だな。

ここからは私の自主規制です。

皆さん大人になってわかることだよ。

このまま最後までオッサン出てこないかも。

チュンチュン

チュンチュン

うっせー！まだ夜中だぞ！
朝チュンは早えーよ！

ぐう

ぐうー

ぐうーぐうーっ

「くっくくっ、ユタカ、腹が空いたならなにかもってこさせよう」

「違う。今のはさっきの鳥だよ」

「チュンチュン鳥はチュン以外には鳴かないぞ」

「じゃあチュンチュン鳥に群がるオス鳥だろ」

「ユタカ。腹が空いたなら素直にそう言えばいいだろう」

「えーでも悪いかなって思ってたさ」

「何を言っているんだ。私は妻に食べるのを我慢させるほど稼ぎがないわけではないぞ」

「そうなんだけどー、じゃあ、肉がいいなあ」

「わかった。用意させよう」

オッサンでは年の割に動きが機敏だな。
もう呼んでるよ。
さっき運動したばっかなのに。

お肉はすぐにやってきました。

脂身たつぷりのめちやくちや美味しそうな肉。

ちゃんとお野菜も添えられてる。

この時間に食べるんだからあんまり意味なくね？

そして飲み物はフルーツジュース。

横で甲斐甲斐しく世話を焼いてくれてるのは、前に話題にもなったお紅茶入れてくれた美人さんです。

この美人さん、前に嫌って言ったんだけど、話聞いたら違うらしい。あつ、今も口の端からたれたタレをふいてくれた。

この美人さん、なんと近視らしい。

近くでお紅茶いれてるときは見えただけど、夕飯のときは離れてたからよく見えなくてしかめっ面になってしまったらしい。

しかめっ面になるぐらい私を見たかったらしい。

変わった人もいるもんだ。

いまではこの美人さん、私専属になってる。

オッサンのオッサン仲間によれば、私専属が誰になるかで、裏で相当揉めて、美人さんは相当あくどいことしたらしい。

恐いけど私に害がなければよし！

オッサンは正面から私が食ってるそこ見すぎだから！

私がつまそうに食ってるところがお気に入りで前にもたまっていた。

「ユタカは本当に美味しそうに食べるな」

「えーだつてうまい」

「そういえば、いつもユタカは美味しそうに食べているから聞いた

「ことがなかったな……」

「なに？」

「ユタカは嫌いなものはないのか？」

「嫌いなものー？…オッサン？」

「…ユタカ、冗談でもよくないぞ」

「オッサン泣きそーウケる」

「ユタカ、先ほどまであんなに愛しあつたではないか」

「キリつとした顔で見えてきてもだめー」

「愛しあつたとかもだめー」

「全然平気」

「恥ずかしくなーい」

「子孫を残していくためです」

「ちよっ、まじ泣くな。冗談だから！」

「本当に？」

「あつ、私の嫌いなものだっけ、うーんとね、うわっ、ない！」

「…ユタカ。私はそんな君が好きだよ」

「良かったね」

オッサンかわいそう。

この国の最高権力者なのに。

でも私って今最高に幸せ。

美人さんがそばにいて、夜中に腹減ったとかいう新妻に付き合って自分食べるわけでもないのに、一緒にいてくれるダンナ。

向こうの世界とかもうホントどうでもいいわ。とくに未練とかないし。

んんっ？あれ？本当になんもなかったっけ？

なんか引つかかるな！。

まあいつか。

大事なことなら思い出すっしょ。

15 (後書き)

ガンガン話進めます

「ユタカ、ユタカ、どうかしたか」

「んあ、オッサンか、どうもしないよ」

「それならいいが、最近呆けていることが多いぞ。大丈夫なのか？」

「大丈夫大丈夫！」

「なにかあればすぐに言ってくれ」

オッサンに生返事を返して、もう一度考え込む。

考え込むが、一向に思い出せない。

最近よくあることだけど、ふとなにかをしていると頭のなかをよぎる。

なにかしなくちゃいけなかったんじゃない？

思い出せないからすぐに他のことに気持ちはいつてしまう。

でも些細なことでも積み重なればでっかくなる。

最近はなんだかなあってぶらり途中下車してる気分じゃない。

「ユタカ、また考え事か？せっかく私といるのだから私を見て欲しいのだが？」

「はいはい、わがまま坊やでちゅねー」

「私は子供ではないぞ」

「見ればわかるよ。オッサン」

「はあ、ユタカ、本当になにかあるなら話して欲しい。私は君の夫なのだから」

「こんなときばっかつかつかつけんな！オッサン！」

「ユタカ：いくら私が罵詈雑言になれているとは言え、愛する君からの言葉にはひどく繊細なんだ」

「ごめんごめん。モナムー」

「どういう意味なのだ？」

「オッサン」

「ユタカっ！」

オッサンはいつもこうやって私のそばにいて気を紛らわさせてくれる。

ちよっといいやつとか絆されてやってる。

オッサンの包み込む雰囲気は私を安心させてくれる。

言わないけど！

「ユタカ、君が言いたくないなら別に言う必要はない。けれど、相談してくれるなら私は嬉しい」

「はあ、オッサンいいやつー」

式を挙げて3カ月、オッサンはいつも私を気にかけてくれて、横に

いることに全然違和感を感じない存在になった。

私も素直にベタツとすることにしてる。

先ほどまでは並んで座ってたけど、今は私がオッサンの上に乗っかって寄りかかっています。

オッサンは喜ぶし、私も落ち着く。

素晴らしい！

「なんか最近思い出せそうで思い出せないことがあってさー、それが気になってんの」

隠してたわけじゃないけど、最近考えていたことをオッサンに話した。

「いつも考え込んでいるふうだったのはそういうことだったのか」

「そうなんだよねー。前の世界のことなんだけどイマイチ思い出せなくて」

「なにか喚んだことと関係あるかもしれんな。明日にでも宰相に聞いておこう」

「おう、よろしく頼むぜ、オッサン！」

一応考えてるけど、そんなに真剣についてわけじゃないからいいんだけど。

心配してくれるオッサンに甘えておこう。

でも、なんか食いもんくれるほうが嬉しい。

このお茶請けのクッキーも美味しいけど。

次の日早速宰相がきてくれました。
ちよつと難しそうな顔して。

でも私は知っている。

それが作り顔だって！

宰相の表情筋がまじで動くのは、愛犬のゴン太がそばにいるときだけなんだってことを！

それとこれは超極秘国家機密なんだと。

オッサンいわく、超やり手の宰相の弱点は漏れないようにだって。だけど、宰相がゴン太にだけデレるのは、入ったばかりの掃除婦だって知ってるのに。

「やほー宰相、ゴン太元気？」

「はい。息災にございます」

「良かった良かった」

まあ宰相にゴン太のこと聞いて息災にございます以外の言葉は聞いたことないけど。

それだけ大事にされてるんだらう。

「で、どうかした？」

「王妃様、最近何やら思い出せないことがあるとか、向こうの世界について」

「ああ、そうなんだよ」

「思い出せましたか？」

「いやー、思い出せない」

「王妃様にはお話ししておかねばならないことがございます」

「なに？ゴン太が婿とるとか？」

実はゴン太、名前がゴン太だけど女の子なんです。

きゃ、恥ずかしい！

「王妃様！それはありえませんか？！…おほん、まさかそれだけのために私が王妃様のお時間を無駄にするわけにはまいりません」

「じゃあなに？ゴン太が家出！？」

「王妃様！！物騒なことを仰らないで下さい！」

「ごめんよ。でもそんな目の色かえて怒んなくても…」

「…申し訳ございません。取り乱しまして」

「はいはい、じゃあなんなの？」

「王妃様の向こうの世界の記憶についてでございます」

「私の記憶？」

「はい。王妃様のご記憶は時間とともに薄れてまいります」

「ああ、そんなこと。ならわかってるよ」

「はっ?」

「だから、わかってる。最近全然思い出せないからなんとなくねー」

「悲しくはないのですか?」

「んー、私って今が良ければいいじゃんって感じだから!」

「ですが、」

「まあまあ、記憶はいいのよ。それはとりあえず置いて、なんかふと思いつきそうなのが気になるのよ」

「そうでしたか。ご記憶が薄れていくことに不安を感じているのか
と思っておりましたが、違ったのでございますね」

「まさかー!私そんなたまに見える?ぶぶっ」

「…」

宰相否定してよ。

普段の私の行いを考えれば無理なのはわかってるけど。

ああー、でも本当になんなんだろ。

何が引っかかっるんだろ。

それは唐突にやってきた。

その日はいつも通り起きて、朝ご飯を食べて、軽くマナーの練習して、お昼ご飯食べて、貴族のご婦人たちとお茶して、おやつ食べて、ウロウロ散歩して、夕ご飯食べて、お風呂入って、寝ようと思ったときだった！

ふつかふつかのベッドの中で明日のご飯に思いを馳せているとき、私は思い出してしまった。ずっとずっと気になっていたことを。

隣にはオッサンがいる。

ぜひとも教えてやりたい。

気になっていたことがわかったと。

でも！これを教えたときオッサンはどういう反応をするだろうか。オッサンならわかって良かったと喜んでくれるだろう。

内心はさておいて。

ああ！言うべきかわざるべきか！

言わなくてもなにも問題ない内容ではある。

オッサンのこれからの私への態度を考えれば言わない方がいいかも知れない。

だが、そのぐらいでオッサンの態度が変わるとも思えない。

さてどうするか。

「ユタカ、どうした、黙り込んで。いつもなら明日は何が食べたいと散々言っているではないか」

「明日はケンタッキー食べたい」

「ケンタッキー？なんだそれは」

「フライドチキンだよ。チキンを特別な揚げ粉にまぶして揚げためちやくちやうまい食べ物」

「そうか…。チキンを揚げるだけならすぐにできるが、特別な揚げ粉は、な。難しいな」

「ていうのが、ずっと思い出せなかったこと」

「ほう、それが…思い出したのか？」

「思い出しちゃったよ」

オッサンは私がさらったと言った事実には驚いてる。まあ聞かれてすぐに答える私も私だけだ。

「チキンを食べたいことがずっと引っかかっていたこと？」

「そうみたい」

「チキンを食べただけか？」

「そっだよ」

「はあ…、私はてっきり家族とか向こうに思い人がいたとか、そう
いったことだと思っていた」

「ええー、なんかたいしことないみたいじゃん、それじゃあー！」

「しかし、チキンだろう？」

イマイチ納得いかない顔してるよ、このオッサン。
ならば教えてやろう！

「オッサン。教えてやろう。まずチキンじゃない。ケンタッキー・
フライドチキンだ！私がどれだけ食べたいと思っていたか。この思
いの丈、しかと受け止める！！まずケンタッキーとは田舎では年に
一度クリスマスに食べるご馳走なわけ。時々夕飯に出てくる唐揚げ
とはわけが違う。大人になったら腹がはちきれぬまで食ってやると
思っていた幻のご馳走。しかし、大人になっても腹がはちきれぬほ
ど食べることはできず。自分のご褒美のときにだけ食べていたケン
タッキー！綾瀬はるかがかうまそうにかぶりついていた肉…。私も食
べたいと思ったさ！でも、金欠で食べれなかったんだよ！化粧品が
相次いでなくなるし、冠婚葬祭重なるし、税金も引かれるし。でも
麵生活に耐えてようやくケンタッキーを買えるだけの金を握りしめ
て、ケンタッキーを買い、アパートに戻って、テールにケンタッ
キーを置いたまま！私は喚ばれたわけだ。おーまいがー」

「ユタカのケンタツキーに対する情熱はわかった。だが食べれないわけだ。今は大人しく寝るべきだと思うぞ」

「なんて薄情な人！それでも私の夫なの！？」

「ユタカ、ユタカ、落ち着いて。何か食べるか？ほら、果物も菓子もあるぞ」

「いい。寝る。夢の中でケンタツキー食べてくる」

「ユタカ…」

思い出したはいいいけどめっちゃくちや食べたくなくなった。

まじ食いたい。

むしゃぶりつきたい！

あー、オッサンまた私の食い意地に呆れてるだろうな。

次の日は朝から鳥肉だらけだった。いろいろあるけど、鳥肉の丸焼きは朝から重いだろ。まあ完食してやりましたよ。あのぐらい私の敵ではない！

そして私の目の前で、どうだって顔してるオッサンにまたちょっとキュンとした。

私って愛されてるーなんて少し照れた。

それも夕飯が出てくるまでは。

だって、テーブルに並んだ夕飯はすべて鳥の揚げ物。

私の言ったケンタッキーに少しでも近いものをと試行錯誤したと思われる鳥たち。

丸焼きから手羽。腿だけ。

揚げられてる色もいろいろ。少しこれ食べれんのものである。

そしてこれまた私の目の前でどや顔のオッサン。かっちーん。

「食べ物を粗末にするなー!!!」

「ゆっ、ユタカ!? どうしたのだ? なにか気に入らないものでもあったか? すぐに下げさせよう!」

「このボンボンがあっ!!!こんなに一気に食べれないだろ! なにや

ってんだ、いい年こいたジジイがあー!!」

「ユタカ、すまない！私も一緒食べる。残さないようにしよう、んっ？」

「このメタボリックがあっ!!食う前に運動してこいやー!!」

「ユタカーっ！気にしていることを、気にしていることを、ひどいじゃないか」

「うっせー。私食べるから静かにしてて」

「ユタカだって最近腹周りをきにしているくせに…」

ぼそりと呟かれた言葉に今日二度目のかっちーん！

もう口利いてやらん！

ここの鳥肉なくなるまで!!

こんにちは

まさかの違う世界でケンタッキー・フライドチキンに遭遇。

下手な鉄砲数打ちや当たるってまじだわ。

昨日オッサンが用意してくれた鳥を手当たり次第に食べてたら、半分過ぎたぐらいに！

どれもうまかったけど、あれ食べた瞬間、無視してたオッサンに抱きついて喜んでしまった。

そして、その夜は熱い一夜を過ごしました。

私がケンタッキーについて熱く語った的な意味で。

一夜明け、昨日の鳥肉残ってる。

朝ご飯と一緒に少しずつ食べる。

でもなかなか減らない。

少しだけ食い意地張ってる私は、とにかく全部食べてみたいからという理由で1人で食べてます。

全部一口目はうまっ！と思うけど、ぶっちゃけ多いわ…。

運動してこようかなー。

オッサンにも腹周りのこと言われたし。

よし！そうしよー。

どこ行こっかな。

長官のとこ行って運動できるとこ借りよっ。

「長官ー！どもー！！」

「王妃！…このようなむさ苦しいところになにかご用意でも？」

「ちよっくら長官の手を借りようかねー」

「私にできることでしたら、なんなりと」

「じゃあ場所かしてくれー走るから」

「走る？なぜまたそのような」

「腹周りが肉ついてきちゃって！食うもん減らすのはやだから運動しようと思って」

「王妃。普通はまず食べる量を減らすのでは？」

「なんで食べるの我慢しなきゃならんのさ。やだよ」

「はあ…王妃がよろしいならかまいませんが」

長官はマツチヨだから長官なんだと思う。

長官がじっと見つめる中走りだす。

ちゃんと部屋でストレッチもしてきた！

さあやるぞー！とは言ったものの20分ぐらいでアウト。

スロージョギングという早歩きぐらいのスピードでするジョギングが続かない。
ウォーキングより効果があつて、ジョギングよりキツくなく続けられる、はずができませんっ！
やべー運動不足だよ。
このあと腹筋とかやろうと思つたけど無理だつた。

「王妃。素晴らしいですな。あんなにも走れるとは！」

「はあ！？喧嘩売ってる？ダメダメでしょ」

「そのようなことはありませんぞ！これだけできるなら王妃の減量もすぐですな！」

ダメだな。

長官ならどんな運動いいとか教えてくれるかと思つたけど使えね。まじないわ。

まじないのは自分でした。
ダイエットは2日で諦めたよ！

「じゃっじゃーん!」

「うん?どうした、ユタカ」

「ぼんぼん」

「ん?どうしたのだ?」

「お腹ぼんぼん」

「ああ!最近たまっていると行っていたがすっかりでもしたか」

「ちげえー!」

「違うのか?」

「違うわ!全然違うわ!」

「ならどうしたのだ?」

「妊娠したあの!」

「…誠か?」

「本当です!」

「なんと!とうとうか!めでたい!…皆の者!皆の者!喜べ!子が

できた！子ができたぞ！私の子だっ！！」

「とうとうってまだ式挙げてから半年じゃん！でも良かったね！。オッサンもとうとうパパだよ」

さっきまでめちやくちや広がった部屋が貴族やら使用人やらで一気に埋め尽くされてた。

そんでお祝いの声が止まらない。

ちよっとうるさい。

でも嬉しいかも。

群がる人を掻き分けてオッサンに近づく。

オッサンまじニヤニヤし過ぎ！

「オッサーン。まじちゃんと稼いでこいよ！食い扶持増えるんだからよー」

「ああ！もちろん！今まで以上に頑張るぞ！」

「それとこの子が大きくなるまで死ぬなよ！」

こんな早く妊娠するとはなあ。

男の子かな、女の子かな。

スイカが出てくるみたいって聞いたことあるけど大丈夫かね？

まずこの世界の医療水準てどのくらいなんだろ。

この半年ぐらいは健康だったからな。

まあ気合いで産むか！

「王妃様！！さあさあお休み下さいー！」

「今飲み物を用意いたします！」

「ただ今お食事を用意いたします！」

「国一番の産婆を手配いたしました！」

「さあさあ王妃様！！今はお休み下さい！」

「えっ、えっ、でえー！大丈夫なのにー！」

オッサンとかには強く出れても、使用人連合には勝てないのが悲しい。

今もベッドに押し込まれちゃったし。

オッサンが手を握っててくれるのが嬉しい。

でもそれより、腹減った。

肉食いたい。

つわりはない。
まったくない。

なんで？

普通こう妊婦さんで大変で大変で周りに心配されたりブルーになったりするもんじゃないのか…。

私まったくないんですけど。

お腹もぽっこりどころかもっさりぐらい出てきてるのに！

食欲満点！快眠！お肌てかてか！

今ならクラスの半数がインフルエンザにかかったのに自分だけかからなかった気持ちがある。

オッサンなんか最初はめちゃくちゃ心配してたのに、一週間ぐらい変わらずにバクバク食べてたら何も言われなくなった。

さーみしー！

今唯一私に体調について聞いてくるのは産婆だけ。

もう一度言う。さーみしー！

今はマナーの時間で、マナーを守りつつ、かつ優雅に見える巻貝の

食べ方を練習中。

体あんまりガツガツ動かせないから、座ってできるマナー講座を開講中。

巻貝の中身を食べ尽くし立ち上がったとき違和感を感じた。

「ん？あれ？うわっ！？恥ずかしい！…みんな下がっていいよ！ばいばい！…！」

「王妃様どうかなさいましたか？」

最後に残って聞いてくれたのはお紅茶の人。

「やばいわーはずっ！漏らした！」

「なにを、」

「なにをって小の方よ！」

「漏らしたって漏らされたんですかっ！？」

「うわー、その言い方傷つくからやめて…！」

「とにかく、着替えましょう！そうしましょう！」

「うわー うわー…！」

「んっ？王妃様！！王妃様！！これはおもらしではありませんわ！…！」

「おもらしって言わないで！。うわー年とったのかなあ」

「王妃様！！ですからこれは破水ですっ！」

「えっ？破水？なにそれ？」

「王妃様！お勉強サボってましたね！あれほど申し上げたのに！」

「ごめんよ。それで破水がどうしたって？おもらしじゃないの？」

「産まれます！王妃様のお子様が生まれるのです！」

「まーさかー」

「本当です。衛兵！産婆を呼べ！王妃様が破水された！早く呼んでこい！とんちんかん！！！」

お紅茶の彼女に押されて破水が自分のことだとあまり受け止められない。

「王妃様！！！」

バンツ！

「大丈夫でございますか？すぐに寝台に横になって下さいませ！」

「はい」

「足を開いて。様子を見ます！」
がばっ！

「なんと！もう頭が見えておる！もう産まれるぞ！早よう産湯を用意せい！」

「あつ…なんか出るかも？」

「疑問系ではありませんせぬ！出るのです！」

「あつ、やっぱり？ああー出るー！！」

「頭が出ましたぞ！胸が出てまいりました！ああ、もう足が！」

なんか呆気なく産まれました。

元気に出てくる前ぐらいからぎゃあぎゃあ言ってる。

産まれたけど、私なんともない。

もっと疲れるとかないわけ？

納得いかないなあ。

まあそれでも産婆の意見で3日は寝てるってことだけ。

ファンタジー！

こっちの世界に来てはじめてファンタジーなことに遭遇した。
私の赤ちゃん…性別がありません！
まじびびる！

「おいこら、オッサン」

「なんだい？ユタカ」

「なんでこの子どっちもついてないんじゃないっ！」「あらっ！」

「ユタカ、ユタカ落ち着いて！産後の経過に良くないぞ」

「説明しろって言うてんだよ」

「なにをだ？」

とぼけたふりしやがって！

とことん追いつめてやるうじゃないか！

「オッサン。私の赤ちゃんは女の子ですか？女の子ですか？」

「今は無性だろうか？」

「無性？」

「産まれたときはそうだろう」

「はあ！？産まれたときには女の子か男の子決まっていますー！」

「なにを言っているんだ。ユタカ。男か女か、どちらになるかは成人するときに決めるものじゃないか」

「まさかあ……」

「なにを、…ユタカの世界では違うのか？」

「普通産まれたときに、そうか…ここは違う世界か」

ファンタジー！

この会話のあと、なぜか一気に体調を悪くしてしまった。

医者の見立てだと、約一年半分、こちらの世界に来てからの疲れが出たんじゃないかって話し。

私が体調を崩してしまったせいで我が子にはまだ名前がない。

不憫なことに。不便なことに。

語呂がよくね？

ふざけないで話すと、こちらの世界では産んだ人間が名前を付けるものって慣習がある、らしい。

だから、本当は私がつけなくちゃいけないのだけど、考え事してる
と眠くなるから無理です。

お休みなさい。ごめんよ、マイベイビー。

名前決まったぜ。

ダニエルにしました！

マイルスイートベイビーは将来男の子になるのです！

一応第一子だからね。

それとダニエル、不甲斐ない母親でごめんよ。

名前つけるの遅くなって。

今日ダニエルは1才の誕生日を迎えたざます！

不甲斐なすぎて言葉おかしいある。

半年ぐらい横になって生活してたら、起き上がる力がなくちゃって苦勞したわ。

起き上がってマイルスイートベイビーを抱っこしたら名前ないことを急に思い出しました。

慌てて名前つけようと思ったたら今更つけるのは良くないから1才の誕生日まで待ちなさいと宣告されて半年。

ようやくつけてあげれた。

1つ肩の荷が降りた！

そして今新たな荷物がのってる。

「ユタカー！！寂しかったんだぞ」

「毎日会ってたでしょ」

「一年以上愛し合っていないのだぞ？その間誰とも交わっていない。

私にご褒美があってもよいのではないか？」

「オッサンのくせに盛ってんじゃねーよ！」

「なんと言われようと構わん！」

「うぎー」

「私が愛しているのはユタカだけだ！」

「…ダニエルもいれとけよ、オッサン」

「そうだな。私たちの宝物だ」

「しょうがない。特別だからね」

こちらの世界に来て2年半。

夫婦仲は良好！！

子供にも恵まれて、美味しいものも毎日食べられて文句なし！

ハンパないぜ!!

もう2人目妊娠しちゃった!

2人目っていうか3人目っていうか。

双子らしいぜ。

ベッドから離れて生活できるようになってまだ4カ月だよ。

ダニエルはとても可愛らしい!

でも誰に似たのかいつも眉間に皺を寄せてる。

なかなかシヨックだよ、これは。

「ふぎゃー!!ふぎゃー!!」

「ああ、ダニエル様、そのように可愛いらしいお声をあげられては不埒者が寄ってまいりますわ!そのお声はマリーにだけお聞かせ下さい」

「ふう、」

「ああ!なんてお利口なんでしょう!!まだまだお小さくていらっしやるのにマリーのことをわかって下さるなんて!」

「...」

うちの息子はわずか1才で空気が読めるらしい。

乳母のマリーはダニエルにベタベタで甘やかしすぎだと思っ今日

の頃。

私がベタベタする隙もありやしない！

ダニエル絶対母親はマリーだと思ってるね！

でもマリーの溺愛ぶりを見ると、私に普通育てられるよりいいかと思う。

私はその時間おやつタイムにあてれるし、すべて問題なし！！

「ねえ、なんかこのパイ味気ないよ」

「そつでございますか？さあお紅茶のおかわりをどうぞ」

「ねえ、あんまり甘くないよ」

「そつでございますか？こちらのフルーツもおいしゅございます」

「ねえ、美味しくない！」

「…王妃様、気のせいでございますわ」

「私が食べ物に関して並々ならぬ執着を持つてることを知ってて言ってる？」

「…私他の用を思い出しました。失礼いたします」

お紅茶のメイドは嘘っぱいこと言い訳して出て行っちゃった。

私マズいパイを前に苦悶した。

全然甘くないパイ。

でも残すのももったいない。

一口かぶりつく。

「甘くない……」

食べても美味しくないパイを前に気分はただ下がり。

さらに追い討ちをかけるような出来事をオッサンは持ち込んできた。
まじないわ。

オッサンが愛妾を囲ったと最近もっぱらの評判なのだよ。
読者諸君。

愛妾を囲うのは私は一向に構わない。

まあ悲しいけどオッサンは皇帝なんだから。

それに、後継者問題もないし、自由にしてくれて大いに結構！
だけど、それに私を巻き込むな！！

まじでお願いします。

「王妃様。最近皇帝陛下がどこに入り浸っているか知っていらっし
やいます?」

「さあ、私は知らないなあ」

「娼婦を街の館に囲い、少しでも時間が空けば足繁く通っていると
か」

「そうなんだあ、だから最近オッサン見てないわけだ」

「まあ！やはり王妃様の元へはいらしていませんか!？」

「そだねー」

「許せませんわ！王妃様を置いて誰かのもとに通うなど！私、侯爵
の名の下に貴族たち全員の連名で正式に抗議させて頂きますわ！よ
ろしいですわね、王妃様？」

「えー、そんな気にしなくて大丈夫だよ」

「大丈夫ではございません。王妃様、よろしいですか？王妃様は元々この世界ではないところから、こちらの身勝手に連れてきてしまったのです。それなのに、泣き喚きもせず、ありのままを受け入れて下さいました。そして、第一子であられるダニエル様をお産みになり、世継ぎがおらず先行きが不安で曇り陰っていた我が国に光をさして下さいました。さらにお子を身ごもり、明るい話題をいつも下さいます。我が儘も言わず、浪費するわけでもなく、他の者に目を向けるでもなく、堅実に王妃様を努めて下さいます。全く文化の違う国で、1から礼儀作法を学び、帝国の恥にならぬようと努力して下さいました。私はそれだけのことをして下さる方には、王妃様であるとなかろうと誠意をもって接するべきであると思います」

「そつ、そつかー」

「まあ好きにして」

「ありがとうございます。では早速…失礼いたします」

「はあ…」

今のは筆頭侯爵家の女侯爵様。

私を崇拜してる。

あれ、なんか自分で言うとお痛い子みたいだわ。

でもまじで貴族たちは私を崇拜してるわけなのよ。

だから、最近の皇帝陛下の愛妾通いがとんでもなくお気に召さないらしいっす。

一応王妃である私に面会できるのはお偉い貴族たちだけなんだけど、そんなお偉い人たちが代わる代わる愚痴を言いにくる。うざい。

どうでもいいのに毎日話されると、どうにかしなきゃいけない気分になる。

コンコン

「またか…ぐへえっ」

美味しくないデザートに面倒くさいオッサンの愛妾話。
テンション下がるわー。

妊娠中なのに次から次へと私のところに問題持ち込むな！
みんな黙れー！

今日もまた貴族から愛妾情報が入る。
しかし、今日は一段とヤバそうだよ！

「王妃様！！なんと皇帝陛下が愛妾を城に召し上げると！」

「王妃様！！陛下は舞踏会で愛妾を紹介するとか！」

「王妃様！！どうか陛下の目を覚まして差し上げて下さい！！！」

「……お願いいたしますっ！！」「……」

「……はあ、話すだけだよ……」

「……王妃様！！ありがとうございます！！」「……」

貴族たちは相当怒っているらしいみたいだ。

先日筆頭侯爵連名で嘆願したらしいけど無理だったらしい。

そのせいで、政治が全く機能してない。

今はなんともなくてもそれが続けば私のご飯事情にも大いに影響するだろう。

動くなら早くと貴族たちに言いくるめられた。

なんか、王妃って偉くないんだな……。

このままだとストライキだと息まいてる。

ストライキを流れて教えてしまったのは私です。
すみません。

悔やまれるぜ。

貴族たちに見守られながら大きなお腹を抱えて立ち上がる。
それに歓声があがる。

ドアまで行き振り返る。

また歓声があがる。

ちよっとうぜえ。

えっちらおっちらオッサンの執務室を目指す。

ひたすら目指す。

とにかく目指す。

一心不乱に目指す。

広すぎるんだよ。

息も絶え絶えで執務室到着。

決戦は次話で。

よろしく！

ああーやだーめんどくせー。
愛妾とかまじどうでもいい。
ご飯さえ食べれば。
でもわかったって出て来ちゃったし、行くか。

コンコン

「たーのもー」

がちや

「あー、失礼しました」

ドアを開けたら乳繰り合うオッサンと女。
部屋もーどろ！
でも厨房に寄ってからにしようかなー。
食いもんもらってこよ。
素晴らしいアイデアだ！

「ただいまー。ねえねえ、厨房でたくさん食べ物貰ってきたから食べようぜー」

「王妃様！ーお帰りなさいませ。随分とたくさん貰ってきましたね」

なんかヤバい雰囲気だけど、私のご飯はこれからも保証されるのかな？

貴族たちに媚び売つとかないと！

子どもたちも産まれるし、私は巻き込まないでくれー！！

その夜、オッサンの側近たちが私のところにやってきた。相変わらずダンディー。

やってきたと思ったらいきなり片膝ついて、私に従うことを誓われた。

ちよっ、意味分からん！

側近たちが言うには、最近のオッサンにはついていけない。

このままでは国が滅びてしまう。

皇帝おろしをするなら私側につく、とのこと。

「私皇帝おろししようなんて思ってないけど…」

「そうなのでございますか？ですが貴族たちは…いえ、わかりました。万事私どもにお任せ下さい」

「王妃様の称号も今のうちだ。味わつといて下さい」

「ええー悪役みたいな台詞サラッと吐かないでよ。長官。それから宰相もそのしたり顔やめて」

「王妃様。私は陛下の側近としてお恥ずかしい限りでございます。どうかご理解下さい」

「あなたなんにも悪くないんだから、気にすんなって。執事、私のご飯は大丈夫なんだよね？」

「はい、もちろんでございます」

「じゃあもう勝手にして。私夜食食べて寝るから、出てって」

みんな好き勝手しすぎじゃね？

皇帝のことそんなに嫌いかねー。

可哀想に。

ご飯まだかなー。

今日昼に厨房行ったときに夜食はハンバーグがいろいろって言ったから楽しみだわ。ぐふっ。

あれ？あれれれ？
なんでだ？なんでこうなった…

「皇帝陛下。お食事の用意が整いました」

「皇帝陛下。本日のご予定をご覧下さい」

「皇帝陛下。謁見の申し出がいくつかございます」

「皇帝陛下。各国から祝いの文や品が届いております」

「皇帝陛下。」

「わかったからとりあえず飯食わせる」

「仰せのままに。皇帝陛下」

いつのまにか皇帝になってました。

でもって皇帝めんどくせー。

オッサンはクビになりました。

可哀想に。

でも私は自分のご飯と、子どもたちが無事なら何も文句はありません。
ーん。

皇帝陛下の飯まじつめー！

て言っても食べてるものはそんなにかわらないけど。

それから前回からまだ1ヶ月しか経ってませんが、子ども産まれま
した！

元気な三つ子。

双子だと思ってたら三つ子だった。

腹でかいと思ってたんだよねー。

ちょっと早産だった私の可愛いアナスタシアとロランとマーリン。
元気にやっってるみたい。

1人に1人乳母がついてる。

私は1人で側近10人ぐらいいるけど！

私は皇帝になつてから言われるがまま動いてたので、最近のことは
よく覚えてない。

でもこれから1ヶ月後に即位の祝と子どもの誕生の祝をあわせて舞
踏会開くらしい。

もし舞踏会で良い人いたら再婚してもいいよとまで言われてる。

「ねむーい！ケーキ食いたい！」

「ケーキはお持ちしますから、寝ないで仕事して下さい」

「へーい」

「宰相、宰相。皇帝権限でこの仕事全部宰相に任せたらマズい？」

「駄目に決まっております！」

「だって皇帝だるーい！王妃が良かったー！」

「皇帝陛下。皇帝陛下の肩に我が国民の行く末はかかっております。

しかとご理解下さい」

「はあっ！？なに言っちゃってんの！？オッサンクビにして、次の日にはいきなり私のこと皇帝陛下って呼び始めたくせに！私なんにも知らなかったがな！」

「そつでございましたね。さあペンを動かして下さい」

「オッサン連れてこーい！！」

「無理でございます」

「なんでっ！？も、もしかして、死んでるとか、」

私の恐ろしい想像を宰相は鼻で笑った。

「前皇帝陛下は今出家して、俗名を捨てております。還俗はできない宗派でございますから、戻ることは無理です。」

「えー、出家てまじかよ」

「さあ、キビキビ働いて下さい」

「やだー」

ただ飯食らいにもどりたい…。

出てきたケーキにかぶりついて顔をクリーム塗れにしながらサインしています。

宰相も笑ってくればいいのに無表情。

せつねーよー。

そいえば、ケーキは甘いです。

妊娠してる間なんかよーわからんけど甘さを感じにくくなってたらしい。

子ども産んでからはめちゃうくちゃ甘いケーキを毎日ホールで食べるぜ。

子ども産んでガリガリに痩せちゃったからちょうどいいのよ。

あーオッサンカムバック！！

30 (前書き)

最終話です。

あとがきありますので良かったらどうぞ。

どうもー。

忙しさにかまけて子どもたちの相手もできない皇帝です。

なんか皇帝になってからもう5年も経ちました。

優秀な側近たちのおかげで問題なくできております。

そして一番助かってるのは貴族たちからの支持率100パーてのが効いてる。

明日には在位5年を記念してパーティーを開くことになってます。

ダニエルが皇帝を継げるまで約10年。

私大丈夫かな。

てか国民が。

私が食い意地はってるせいで国民まで食い意地はるようになってきちゃったのよ。

一般の国民まで肥満率が上がってるって宰相言ってたなあ。

私も今年で30才だし、控えるべき？

「皇帝陛下。少し休憩なさって軽食でもいかがですか？」

「やったー！食べる食べる！！何かな？」

「最高級牛肉のサンドイッチですわ。執務中でも食べれるようにと」

「さすがー、お紅茶さんは気が利くなあー。ワンダフル」

お紅茶の人は結局名前覚えてなくてお紅茶さんになりました。

「うまー！！まじウマイ！肉汁が、あつ、たれる！べろっ」

肉汁多すぎて片手じゃ無理だ、これ！

「うまー！..」

「それはよつございました」

「そいえば子どもたち元気？」

「はい。ダニエル様はとても優秀で文武両道とはダニエル様にあるようなお言葉ですわ」

「まーじでー。本当にあの子、私の子？」

「なにを仰られますやら。アナスタシア様は最近、騎士の1人に恋慕しているようで見えてとても微笑ましいかぎりです」

「いつちよ前に恋？やるなあ...邪魔しちゃお」

「陛下。お可哀想でございます。おやめ下さい」

「へーい」

絶対にいたずらしてやる！！

「ロラン様は物憂げにお外を眺めていらっしやることが多ございます」

「ロランが？物憂げって5才児に使わないでしょ？変じゃね？」

「そのお言葉がぴったりでございますわ。一度ご覧になって下さい」

「へいへい。マーリンは？」

「マーリン様は…最近では城下が気に入ったようでお供をつれて遊び回っていらっしやいます」

「元気だなー。まあ子どもはそつでなきやねー」

みんなすくすくと育っていくこと。

夏休みの朝顔並だよ。

「皇帝陛下。午後からは郊外の宗教施設に伺うことになっておりますから、その手にあるサンドイッチを放してさっさと支度なさって下さい！」

「なにを言ってるの、宰相！鬼！このサンドイッチは私の命の次に大事なんだよ！！無理！」

「はあ、陛下。その食い意地どうにかありませんか…」

「陛下。包んで差し上げますから支度を。宰相はいつ心臓が止まってもおかしくな年齢なんですから！！」

「ごめん。お年寄りには優しくねーてことか。しょうがない。しばしのお別れね、サンドイッチさん！」

「陛下！ふざけてないで早くー！」

本当に宰相はそのうち私を怒ってるうちにぼっくりいっちゃいそう。
さあさあ、みんな元気にやっておりますよ。

そろそろお別れみたいだわ。

こっちの世界来てからいろいろあったけど、結果オーライ！

食べ物があれば問題なし！！

今日も明日もこれから私の食べ物ライフは続いていくぜ！！

普通とはだいぶ違うねーとか思ってたけど、ここまでサンキューベ
リーマッチ！

じゃあねー。

30 (後書き)

最終話でございます。

今までありがとうございました。

文章とも呼べないものをつらつらと、お目汚し失礼しました。

ですが、もう少しだけお付き合い下されば有り難いです。

あと数話、番外編を書くつもりです。

よろしくお願いいたします。

番外編：オッサン

私はつい先日まで、大国の皇帝をしていた。
大陸一の大帝國。

すべての歴史は我が国から始まり、広がっていった。

遙か昔、口伝でしか伝えられていない世界の興りに我が国は誕生した。

小さな集落から小さな国、そこから様々な争いを繰り返し今の帝國がある。

争いが収まり一つの大きな国になり、安定するまでさらなる時間を要した。

その時代に異なる世界から現れた女人が、荒れ果てた領土と国民を導いたそうだ。

そして、その代の皇帝と結ばれた。

そこから喚ぶことが始まり、何人、何十人、何百人という女が喚ばれた。

国は栄えた。

頂というものがないかのように繁栄は続いた。

いや、続いている。

私は生まれた瞬間に皇帝になることが決まり、皇帝になり、死ぬものと思っていた。

過去のことだ。

私はもう皇帝ではない。

ただの人だ。

面倒な星のもとに生まれ、喚ぶこともできず、私はいつも怯えていた。

自分が死に国の直系の血が絶えることを。
貴族や国民たちは無意識に皇帝の直系には畏敬の念を払い、好意を覚える。

だから私は馬鹿にされたこともないし、意見されたこともない。
それが私には恐ろしかった。

期待を裏切ることになってしまったとき、彼らはどうなるのだろう。
物心ついてからずっと逃げていた、それから。

子が出来れば変わるかというろいな女を抱いた。

それこそ三桁では足りないほどに。

しかし、抱けば抱くほど私は追い詰められた。

避妊もしていないのに一人も子ができない。

子種がないのかと悩んだ。

その様子を見かねた側近の一人が、喚んだ女でなければ皇帝の子は
なせないことを調べてくれた。

それに安堵した。

では喚んでも誰も来なければ？

女が子をなさなければ？

私はまた怯えた。

気の長くなるような時間を私は一人怯えながら、虚勢を張り過こし
た。

そこに喚ばれて現れたのがユタカだった。

ユタカは若いけれどとても大らかな性格の持ち主だった。

私を同じように扱うその様に惹かれた。

私の恐怖は拭い去られた。

彼女といるすべての時間が輝いていた。

彼女は喚ばれてから僅か半年で子をなした。

それに私は救われた。

血を絶やすことになるのではないかという負の思いは掻き消えた。

ユタカは私の全てになった。

厳しいことを言われても愛を感じた。

それからとても気分が良かった。

体がとても軽くなり、なんでもできる気がした。

ここ数年は政策も目新しいこともせず同じことを繰り返していたが、良策がいくつも浮かび実行した。

全てが結果に繋がった。

私は浮かれていた。

ユタカが女遊びに関しても、鷹揚なのをいいことに軽くなった体を
使い遊び回った。

ユタカが子を産んでからは暫くユタカのもとにいた。

ユタカが産んだ子が帝国の血を継ぐ者かと思えばさらに気分は良
くなった。

ユタカが二人と三人目を妊娠したと聞いた折は、とうとう私も血か
ら解放されると思った。

二人、三人いれば一人が死んでも血が絶えることはない。

私のような思いをさせなくて済むと思えば、酒と女はどんどんす
んだ。

ただ一つ、ユタカの私への態度が日に日に気に食わなくなっていた。

そんなときだ。

彼女と出会ったのは。

彼女は高級娼館の一番人気だった。

私は皇帝で、館の一番人気がつくのは当たり前だった。

彼女はとても柔らかい女だった。

いつも優しく私を受け止め、私の言うことには全て是という。

ユタカとは違う優しい肯定。

私をからかうものではない返答。

淑やかで私の後を静かについくる姿。

ユタカとは全く違う。

彼女には女の温かみがあった。

私は彼女を求め、足繁く彼女のもとに通った。

執務は疎かになりがちになった。

いてもたってもいられず彼女を身請けした。

莫大な金がかかった。

彼女のために帝都一の屋敷を建てさせた。

内装も一流のもので揃えた。

また莫大な金がかかった。

けれど、彼女は喜んでくれた。

それで全てが良かった。

執務は全くしなくなつた。

ひたすら彼女のために尽くした。

彼女の愛が、肯定が心地良かった。

ある時、高位貴族たちが私のもとにやって来て一枚の紙を差し出した。細かい字でびっしりと埋まった紙を私は読む気になれず、貴族たちを見た。

その時は横にいる彼女を見初める者がいなかったただだけが心配だった。

貴族たちの代表のようである私の側近の一人は、一言サインを、と言った。

言われるがままサインし、皇帝だけが持つ印を押した。

内容など確認せずに。

宰相は紙を手に取り確認をし、徐に頷いた。

「では、前皇帝陛下。御前失礼いたします」

その言葉に違和感を感じた。

前皇帝陛下、どいいう意味だ？

私は現皇帝だ。

問いかければ、宰相は無表情を崩すことなく言った。

「前皇帝陛下。只今、前皇帝陛下はすべての権利を放棄なさいました。これにより皇帝陛下の位は返上。私財等もすべてが国庫に入ります。そして今日から数えて十日後、前皇帝陛下には出家して頂き、仏門に入って頂きます。それまでに身の整理をなさいませ」

そんな馬鹿な！私は勢いよく紙を引ったくった。

確認するために目を通せば、本当に書いてあった。

へ口へ口と力なくソファに座り込み、私はかすめるような声で、誰が次の皇帝になるのか聞いた。

淡々と宰相は言葉を紡ぐ。

「ユタカ様でございます。貴族たちの了承は既に満場一致という形でとっておりますのでご心配には及びません」

ユタカが…。

それは衝撃だった。

ユタカは皇帝の血を継いでいない。

なれるわけがないのだ。

私は謔言のように呟いた。

それにも宰相は律儀に答えてくれた。

「あくまで、第一子であられますダニエル様の御成人までということになっておりますが、ユタカ様が皇帝位を冠することに誰も異論はございません。そうなったのも一重に前皇帝陛下であられますあなた様が執務を放棄し、城を纏めることをしなくなったためでございます。ユタカ様は執務の方は簡単なものにしか手をつけることはかないませんが、主のいない城をよく纏められました。貴族たちと密に付き合い、城に仕える者に声をかけ、主のいない城をいつも笑い声で賑やかにして下さいました。それを見て真の皇帝が誰かなど聞くまでもございません。そこに皇帝の血など必要ありませんか」

私が散々悩んできたことはなんだったのかと思った。

たった一つのサインで私はすべてを失うことになった。

そして気がつけば寺にいた。

その寺は私の全く知らない寺だった。

元々世界に広く認知され信奉されているのは創生の世から伝わる物

語の神たちで、仏教とはかなり新しい宗教である。

その仏教のなかでもここはさらに新しい部類に入るらしい。

多分一度仏門に入れば還俗できないということを選ばれたのだろう。その教主様はダンバリ様！

彼の方は素晴らしい方で、現人神であらせられる。

ダンバリ様の教えは俗世を捨て、身も心も全てを投げ打ちダンバリ様に仕えれば、全ての悩みは立ち消え、幸福になるだろうと説かれた。

さらに今までの私の悩み考えてきたことは全て、ダンバリ様にお仕えできるようになるまでの修行期間だということだ！

それを聞いた瞬間、全てが報われた気がした。

今では、私の全てはダンバリ様のもの！

ああ、なんて幸福なのだろう！！

今度皇帝陛下が視察にくるらしい。

ぜひダンバリ様の素晴らしさを教えて差し上げねば！！

番外編：オッサン（後書き）

オッサンの番外編いかがだったでしょうか？

いくつかオッサンのその後が気になるというとお声を頂きまして、まずはオッサンをと書かせて頂きました。

解説させて頂きませう。

本文だけじゃわからない駄文。私はこう解釈したからいいわ！という読者様はここでストップ！

オッサンがもの凄いウジウジした人間になってしまいました。

その本質は、他者への依存です。

ユタカが来るまではただ1人で皇帝をまつとうしてきましたが、ユタカという女性に惹かれ、ユタカの心地よい強引さに依存していきます。

けれど、皇帝という地位についていたオッサンは、全てにイエスの返事を素直に出来ないユタカが段々と依存する対象から外れていきます。

そして出会うのが愛妾。

愛妾はオッサンを肯定して、気持ち良く持ち上げます。

それこそが甘ったれたオッサンの求めていたもので、依存する道になりません。

そして無理矢理、引き離され、出家。ダンバリ様との出会い。ダンバリ様はオッサンに身も心も投げ打ちダンバリ様に仕えるよう言います。

それは最高の依存。

最早人して思考する必要もなく、ただ言われるがまま生きるだけ。なんと楽なこと！

悩みも怯えもなくダンバリ様の言うことを聞くだけ。

それがオッサンの幸せ。

彼は今、幸福なのです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0122v/>

少し違う？

2011年8月13日15時17分発行